

とうかいどうちゅうひぎくりげ  
東海道中膝栗毛

初編序

じつぺんしゃ いっく  
十返舎一九

はこね はちり ながもちうた  
箱根八里の長持唄には、たけ 猛きさいりよう 宰領の心をやわ 和らげ、すずめ 竹に雀

まごうた  
の馬子唄には、おにころ 鬼殺しをかん 爛せしむ。是これ 其の歌のとくりぎけ 徳利酒、のめ 呑

うたい  
や謡ひの旅衣、たびころも 都をさして行きがけのだちんちよう 駄賃帳をく 繰り返かえ

ふで  
し、筆の建場にたてば 雲駕の、いきづえ 息杖をしてむだ ゑいやらやつと、むだ 書き

つづ  
綴りたる東海道、とうかいどう 五十三次のみちのき 記行に、ぶしやれ 無洒落とむだ 方言の二

わりまし おも に  
割増、たわれうた 重荷にこじつけ夷曲歌、それが中にもただひとよ 一夜、すし 鮓

もり  
のめし盛押しかけて、あきのうこい 商ふ戀のはこまくら 箱枕、その有増をあらまし 宿帳の

帖とじものとなしたるは、空尻からじりの殻無体からむたいなる、ほんほんの噺はなしの問屋場といやば  
もどきたのん、ハイ頼たのんます頼たのんますと、此この本ほんの鹿島立かしまだちに、序じよする  
ことしかり。